

氏 名 中島 次郎

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1086 号

学位授与の日付 平成 19 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 『淋敷座之慰』の研究
—近世前期歌謡とその周辺—

論文審査委員	主 査 教授	鈴木 淳
	教授	武井 協三
	准教授	齋藤 真麻里
	教授	江本 裕（大妻女子大学）
	名誉教授	原 道生（明治大学）

論文内容の要旨

本論文「『淋敷座之慰』の研究—近世前期歌謡とその周辺—」は、延宝四年（1676）成立で、寛永年間以降の歌謡を広く収録した『淋敷座之慰』を全体的に考察したものである。本作品は、その資料的な価値が早くに認められながら、その本格的な研究は稀であったものの一つである。

全五章から構成されるが、その章立ては、以下の通りである。

序章 近世前期歌謡について

第一章 『淋敷座之慰』の成立

第二章 『淋敷座之慰』の歌謡—翻刻と解題—

第三章 『淋敷座之慰』歌謡の個別研究

第四章 『淋敷座之慰』の環境

序章では、まず研究史を振り返り、特に藤田徳太郎を高野辰之の業績の批判的な継承者として位置付け、高く評価している点が特徴である。また従来からの歌謡研究が通史的な傾向に偏っていて、時代を輪切りにするような視点が欠如している点を指摘、その反省の上に立って、『淋敷座之慰』を取り上げるとする。さらに、『淋敷座之慰』の諸本、研究史、それから本論文の概要を示す。

第一章は、『淋敷座之慰』の成立についての考察で、全四節から成る。現存諸本の祖と見られる国立国会図書館蔵式亭三馬旧蔵本に依り、序文「愚意」、題に付された符号、目録の朱書等について、近世史家の説を取り入れながら考察を試みている。第二章では、三馬本について、全体を二十七の節に分類し、計七十首の歌謡を、原本にあたう限り忠実に翻刻したうえで、それぞれに解題を付し、本集を概観した。全二十八節から成る。新資料として、藤田徳太郎旧蔵資料である『江戸まんざい』を紹介する。

第三章では、いくつかの歌謡について取り上げ、詳細な検討を加えた個別研究を集めており、全五節から成る。そのうち「古浄瑠璃の「みやこめぐり」について」「『淋敷座之慰』の「竹斎」などは、既発表論文である。また、国立国会図書館蔵『木やり大全』他の新資料紹介を含む。第四章は、『淋敷座之慰』から漏れた近世前期歌謡である、『かうしんの御本地』『古来より男立之名』『おどりくどき』等についての考察である。全五節から成るが、そのうち「野郎歌舞伎と男だて—『古来より男立之名』川村十兵衛条—」は既発表論文である。

本論文の特色は、『淋敷座之慰』に収載される歌謡について、当時の芸能、演劇、小説、俳諧、随筆などの領域を幅広く見渡しながらか、その詞章を多面的に吟味し、背景や伝来について分析を加えている点にあるといえる。現段階では、歌謡によって考察の程度にかなり繁簡粗密が認められ、いまだ解説の及んでいない部分も相当、残されているものの、将来、全注釈を企図しながら、さらに研究を進めるとしている。

論文の審査結果の要旨

日本中世末期から近世前期にかけては、歌謡と踊りが隆盛を誇った時代として知られるが、その具体的な様相に関しては、実証的に解明されているとはいいがたいものがある。中島次郎君の博士論文「『淋敷座之慰』の研究—近世前期歌謡とその周辺—」は、そうした研究史上の空白部分を埋めるべく、江戸時代前期の延宝四年（1676）に編集された、近世前期歌謡のもっとも基本的な写本資料である『淋敷座之慰』について、詳細な検討を試みた労作といえる。全体は、序説及び四章から構成されており、第一章「『淋敷座之慰』の成立」と第二章「『淋敷座之慰』の歌謡」は、本集の全般的考察で、第三章「『淋敷座之慰』歌謡の個別研究」と第四章「近世前期歌謡の環境」は、各歌謡の個別研究である。

まず序章は、主に高野辰之、藤田徳太郎、笹野堅らの先人による近世歌謡の研究史についての考察で、歌謡が、小説、俳諧、演劇、芸能などの諸ジャンルに幅広く関わりを持つものであるにも関わらず、従来の研究がジャンル別の縦割りで行われてきたことの弊害と限界について論じている。

ついで第一章は、本論文で基本的なテキストとして取り上げる、国会図書館蔵式亭三馬旧蔵本についての考察である。近世史家林基の研究成果を取り込み、本テキストの符号や朱書頭書の意味を検討し、併せて本集の編纂意図を探っている。

第二章では、三馬旧蔵本を、可能な限り原本に忠実な復元を意図した翻刻を行いつつ、計七十題、二六二首に及ぶ歌謡全般について、諸分野における関連資料を博捜しながら、解題的な考察を試みている。その中には、巻頭の「王代記之謡」が、当時の実用書であった『年代記』の検索を目的としたものであること、また石橋生庵の『家乗』等の記事によって、『談海』所載の記事を根拠とする延宝頃の丹後節衰退説を、「サンゴ」を「タンゴ」と読み違えた謬説と断じたこと、『松平大和守日記』等によって、西鶴、近松でも有名な清十郎節が早くから江戸吉原で流行をみていたこと、その他、示唆に富んだ指摘が少なくない。さらに、本集が浄瑠璃、歌舞伎、木遣り、万歳、祭文など、雑多な内容に渉る歌謡集であるとの観点から、本集を遊里の流行歌あるいは三味線歌曲集とする旧来の見方に異を唱えるのは、妥当な主張といえる。

第三章は、古浄瑠璃系の「道行」や「木やり」「竹斎」等に関する個別研究で、それぞれ本格的な考察が加えられている。中では、既に日本近世文学会で発表し、機関誌に掲載されて評価を受けたものであるが、本集の歌謡「竹斎」は、寛文頃の江戸における仮名草子『竹斎』（江戸版）の流行を元に理解すべきとの議論を展開した「『淋敷座之慰』の「竹斎」」が説得力を感じさせる好論である。第四章は、野郎歌舞伎や風流踊りとの関わりを論じた意欲的な論考を含むが、中でも「寛文三年刊『おどりくどき』—「くどき」について—」は、緊迫感に満ちた議論であり、歌謡の「くどき」について、明暦年間の友甫という法師による「おどりくどき（踊り口説）」にその始源を求め、機知的な「物は尽くし」を本質とするとの説は、従来の考えを確実に一歩進めるものである。

さらに、第三、四章を通じて、「木やり大全」「かうしんの御本地」「おとりくどき」「御船歌」（高知藩・丸亀藩）など、従来、注目されなかった資料を発掘し、これらを俎上にのせて考察している。このことは、新資料紹介の意義も併せもつもので、学界への貢献は大としなければならない。

以上の理由により、本論文は、学位論文として十分な内実を備えていると判断される。もとより、書式が不統一であったり、考察が不十分であったりして、調査結果を十分にまとめ切れていないところも少なからず認められる。しかし、従来、歌謡ごとに個々に進められてきた本集について、諸ジャンルと歌謡との関わりを広く見通しながら、まがりなりにも全般的考察を試みたことは、特に評価して然るべき点であろう。今後、従来の狭い専門意識による歌謡研究や、歌謡研究の蓄積への目配りを

怠り勝ちである他ジャンルの研究が、得てして陥りやすい独善的解釈や一面的解釈を克服しつつ、研究のさらなる充実、整備を図り、本人の計画通り、本集全体の注釈の仕事に進展することを期待したい。